



**臨床：**馬はサラブレッド種，牝，鹿毛，19歳である。飼育地は北海道南部である。熱発39.5°C，抗生物質投与で一時的に多少下熱。脈搏65~70。結膜不潔，貧血性。食欲不振，赤血球数560万（チェック。2時間）。ジロチーテン2/1万。尿蛋白卅。経過3日で同地で殺処分につさる。同一牧場で他に1頭斃死馬あり（それについての詳細不明）。**肉眼所見：**肝および脾の腫大（約3倍）並びに腎盂炎ありという。**顕微鏡所見概要：**送付されてきた肝，脾，腎およびリンパ節の各小片を検索。研修会呈出標本は肝とリンパ節。肝 (a)小葉ほぼ，瀰漫性に内皮細胞活性化並びに増殖；多発性に大小の結節（Granulome）を形成；盛んに類上皮化を示し，しばしばラングハンス型などさまざまな形の巨細胞化；多少繊維形成性（？）（Fig. 1, H.-E., ×47.5）。(b)内皮細胞は盛んに赤血球あるいは鉄反応陽性色素を貪喰。(c) Sinusoide には増殖内皮とともに円形細胞（リンパ球，プラズマ細胞）なども混ず。グリソン氏鞘にもプラズマ細胞少数。血管内に一般に細胞多し；巨細胞も混ず。(d)類上皮細胞並びに巨細胞において原形質に好酸性針状ないし細長桿菌様封入物を含むもの稀に見出さる。封入物はチール・ネールゼン陰性，グラムは陽陰ともに陰性，PAS陽性。(e)主として小葉内性に時折胆管の軽度の新生あり；稀に巣状を呈す。(f)200枚の間断—連続切片標本で好酸性核内封入体を有する肝細胞1個見出さる（Fig. 1, 挿図, H.-E., ×770）。(g)肝細胞一般に顆粒状変性。結節周囲の肝細胞は変性より強く，壞死にも至る。リンパ節 ほぼ全

体にわたり細網細胞増殖；多発性に類上皮細胞結節（Granulome）形成；しばしば肝における同様に巨細胞形成（Fig. 2, H.-E., ×190）。原形質内に肝における同様の好酸性細長封入物を含む類上皮細胞稀に見出さる。髄索にプラズマ細胞増生。浮胞の大きさはほぼ常。脾 赤髄にて細網細胞増殖；しばしば上述同様の結節形成；その量的程度はリンパ節における程でなし。赤髄にプラズマ細胞増殖；小動脈周囲性に細胞増殖する像なし。浮胞むしろ小；中心動脈時折水腫性膨化ないしアミロイド様物質沈着示す。腎 髄質に比較的大きな結節（Granulome）あり。それは主として原形質豊富な突起を有する結合織系細胞からなる；類上皮細胞化並びに巨細胞化頻繁；リンパ浮胞形成を伴う。結節は多少繊維形成性。原形質に上述同様の好酸性細長封入物を含む巨細胞および類上皮細胞しばしば。また結節形成主体細胞の大部分原形質にPAS陽性物質を含む；時折そのもの原繊維様に見ゆ。考察：組織学的診断はこれを Retikulose とするのが妥当と考える。伝染病変とする見方もあるいはあるかと思うが，病変を作り上げている細胞種，個々組織部位における状態等から見て，一応それを伏せておいたら如何かと思う。(b)増殖細胞原形質内の好酸性細長桿菌様封入物はあるいは細胞が産生しつつある原繊維のようなものではなからうか。(c)肝細胞核内好酸性封入体は，たつたの1個ではこれを何とも致しかねる。(d)本例のような病変を示す馬には，稀ではあるが，遭遇できることは確かである。